

近畿中央部方言におけるシテイル相当形式の動態

— 現在形と過去形の非対称現象をめぐって —

日 高 水 穂

1. はじめに

『日本言語地図』（国立国語研究所編 1967）53 図「いる」によれば、人の存在を表す動詞は東日本でイル、西日本でオルが使用される。また、『方言文法全国地図』（国立国語研究所編 1999）198 図「散っている（進行態）」、199 図「散っている（結果態）」によれば、存在動詞の補助動詞用法（以下、シテイル相当形式）では、東日本でテル類（シテル等）、西日本でトル類（シトル・シトー・シチョル等）およびヨル類（シヨル・シヨー等）が用いられる。テル類は進行態・結果態の両方を表すが、トル類は結果態、ヨル類は進行態を表す。

一方、近畿中央部方言では、伝統的に存在動詞としてイルとオルが併用されてきたことが知られている。歴史的に見れば、「中世末から近世にかけて京阪の口語を反映した文献では大抵「おる」よりも「いる」が多く用いられ、しかもその「おる」は「見下げ」の意味を含むことが普通だった」という（金水 1984）。

近畿中央部方言の存在動詞の使用状況には地域差があり、京都・滋賀ではイルがオルよりもよく用いられるのに対し、大阪・奈良は両者が同程度に使用される一方、イテルという京都・滋賀には見られない形式が使用される（宮治 1990）。また、シテイル相当形式については、西日本方言一般の傾向とは異なり、テル類、トル類が進行態・結果態の両方を表すアスペクト形式として用いられる一方、ヨル類は進行態を表さず、「しやがる」に相当する卑語的表現となっている（井上 1998）。

以上は先行研究によって明らかにされてきた存在動詞とシテイル相当形式に関する各地方言の使用状況であるが、近畿中央部方言（特に大阪方言）では、現在、シテイル相当形式において、現在形ではテル類、過去形ではトル類が使用されやすいという、これまで指摘されて来なかった現象が認められる。本稿では、この現象の実態を報告するとともに、こうした現象が生じる要因について考察する。

2. 近畿中央部方言の存在動詞とシテイル相当形式の使用実態

2.1 現在形と過去形の使用形式に関する世代別調査

近畿中央部出身者の存在動詞とシテイル相当形式の現在形と過去形の使用形式を、世代別に調査した⁽¹⁾。調査項目は、下記の例文の下線部分の使用形式と使用意識を回答するというものである。

(1) (私は) 今自分の部屋にいる。

a イル b イテル c オル

(2) (私は) 昨日の夜はずっと自分の部屋にいた。

a イタ b イテタ c オッタ

(3) (私は) 今テレビを見ている。

a ミテル b ミトル c ミトー d ミヨル e ミヨー

(4) (私は) 昨日の夜はずっとテレビを見ていた。

a ミテタ b ミトッタ c ミヨッタ

(5) (私は) 今とても疲れている。

a ツカレテル b ツカレトル c ツカレトー d ツカレヨル e ツカレヨー

(6) (私は) 昨日の夜はとても疲れていた。

a ツカレテタ b ツカレトッタ c ツカレヨッタ

従来、近畿中央部方言では、イルは丁寧で主体が目上の場合に使用し、オルはぞんざいで主体が目下の場合に使用する傾向があるとされているため、本調査では主体の人物への待遇意識に個人差が生じないように、一人称を主体とする例文にそろえた。(1)(2)は存在動詞の本動詞用法、(3)～(6)は補助動詞用法で(3)(4)は進行態、(5)(6)は結果態の用法で、それぞれの用法について現在形と過去形の例文をあげた。回答の際には、予想語形のそれぞれについて、「よく言う」ものと、「言うこともある」ものと、「言わない」ものに分けて回答してもらい、適宜、使用意識についても回答してもらった。回答者は中高年層(H)17名(1940～1965年生まれ)、若年層(L)16名(1994～1995年生まれ)、調査時期は2015年6～8月である。調査結果は表1に示した。

表1では、現在形よりも過去形のほうがトル類の許容度が高い回答に網掛けを付してあるが、中高年層、若年層とも、大阪出身者にそうした回答が現れる傾向があることがわかる。

使用意識の回答では、京都出身者にはオル・オッタ、トル・トッタはいずれも「ぞ

表1 近畿中央部出身者の存在動詞とシテイル相当形式の世代別回答

記号	出身地	性別	(1) いる	(2) いた	(3) 見ている	(4) 見ていた	(5) 疲れている	(6) 疲れていた
H01	京都府京都市	男	○ <u>○</u>	○ <u>○</u>	○	○	○	○
H02	京都府京都市	男	●	●	○	○	○	○
H03	大阪府高槻市	男	◎	○	○	○	○	●
H04	大阪府吹田市	女	○	○	○	○●	○	○●
H05	大阪府豊中市	女	○◎●	○◎●	○	○	○	○●
H06	大阪府大阪市	男	○◎	○●	○●	○●	○●	○●
H07	大阪府大阪市	女	○◎	○◎	○	○●	○	○●
H08	大阪府大阪市	男	●	◎●	○●	○	○	○●
H09	大阪府大阪市	女	○●	○●	○	○●	○	○●
H10	大阪府大阪市	男	○◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
H11	大阪府堺市	女	○◎●	○◎●	○	○●	○	○●
H12	大阪府大東市	男	◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
H13	大阪府羽曳野市	女	◎	●	○	○	●	○
H14	大阪府太子町	女	○◎●	○◎●	○	○	○	○
H15	奈良県御所市	男	◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
H16	奈良県当麻町	男	○◎●	◎●	○	○	●	●
H17	兵庫県加古川市	女	○●	○●	○●◆	○●	○●	○●
L01	京都府京都市	女	○◎	○◎	○	○	○	○
L02	京都府京都市	女	○	○	○	○	○	○
L03	京都府木津川市	女	○●	○	○	○	○	○
L04	大阪府高槻市	女	◎●	●	○	○●	○●	○●
L05	大阪府茨木市	女	○●	○●	○	○●	○●	○●
L06	大阪府大阪市	男	●	●	○●	○●	○●	○●
L07	大阪府大阪市	男	◎●	●	○	○●	○●	○●
L08	大阪府松原市	男	◎●	◎●	○●◆	○●	○●	○●
L09	大阪府堺市	女	◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
L10	大阪府東大阪市	女	◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
L11	大阪府八尾市	女	◎●	◎●	○●	○●	○	○●
L12	大阪府太子町	男	◎●	◎●	○●	○●	○●	○●
L13	奈良県橿原市	男	◎●	◎●	○	○●	○	○●
L14	兵庫県宝塚市	男	●	●	○●	●	○●	○●
L15	兵庫県神戸市	女	◎●	●	○●◆	●	●	●
L16	兵庫県加古川市	女	○●	○●	○●◆	○●	●	○●

- (1)(2) : ○イル/イタ ◎イテル/イテタ ●オル/オッタ
 (3)(4) : ○ミテル/ミテタ ●ミトル/ミトー/ミトッタ ◆ミヨル/ミヨー/ミヨッタ
 (5)(6) : ○ツカレテル/ツカレテタ ●ツカレトル/ツカレトー/ツカレトッタ
 ◆ツカレヨル/ツカレヨー/ツカレヨッタ

下線あり:「よく言う」もの 下線なし:「言うこともある」もの
 網掛け:現在形よりも過去形のほうがトル類の許容度が高い回答

んざい」とする回答 (H01・L01) が見られたが、大阪出身者には現在形のオル・トルは「ぞんざい」「雑な感じ」だが過去形のオッタ・トッタには特にそうした意識はないとする回答 (L05・L09) が見られた。イルに関しては、「標準語 (共通語) 的」であるとする回答 (H16・H17・L06・L12・L13) があつたが、テルについてはそうした回答は見られなかった。

存在動詞の本動詞用法には、現在形と過去形の使用形式に非対称現象は生じていないが、それは、イルを標準語形、オルを方言形と認識し、用法差ではなく文体差 (コード差) によって使い分けていることによるものと思われる。一方、補助動詞用法では、テル類とトル類は標準語形と方言形としてではなく、待遇の意味の異なる形式として認識されている。トル類は軽卑的な意味をもつが、何らかの要因によって、過去形ではその軽卑の意味が解消 (中和) される、ということになる。

2.2 存在動詞とシテイル相当形式の用法別使用率調査

2.1 の調査で認められたシテイル相当形式の現在形と過去形の非対称現象が、他の活用形についてはどのように現れるのかを確認するための調査を行った⁽²⁾。調査項目は、下記の例文の下線部分について、選択肢の中からもっともよく使うものを1つ選んで回答してもらう (選択肢以外の言い方をすることは「その他」に記入する) というものである。

- (1) (私は) 今自分の部屋にいる。
a イル b イテル c オル その他 ()
- (2) (私は) 昨日の夜はずっと自分の部屋にいた。
a イタ b イテタ c オッタ その他 ()
- (3) (私は) 今テレビを見ている。
a ミテル b ミトル c ミヨル その他 ()
- (4) (私は) 今はテレビを見ていない。
a ミテヘン b ミトラン c ミヨラン その他 ()
- (5) (私は) 昨日の夜はずっとテレビを見ていた。
a ミテタ b ミトッタ c ミヨッタ その他 ()
- (6) (私が) テレビを見ていたら知り合いが出てきて驚いた。
a ミテタラ b ミトッタラ c ミヨッタラ その他 ()
- (7) (私は) テレビを見ていて電話が鳴ったのに気づかなかった。
a ミテテ b ミトツテ c ミヨツテ その他 ()

(8) (私は) 今とても疲れている。

a ツカレテル b ツカレトル c ツカレヨル その他 ()

(9) (私は) 昨日の夜はとても疲れていた。

a ツカレテタ b ツカレトッタ c ツカレヨッタ その他 ()

本調査でも、例文は一人称を主体とするものにそろえた。(1)(2)(3)(5)(8)(9)の調査文は2.1の調査と同じものである。「見る」のシテイル相当形式について、(4)否定現在形、(6)タラ形、(7)テ形を加えた。集計対象とした回答者は1992～1997年生まれの若年層で、大阪府出身者76名、兵庫県出身者27名、奈良県出身者15名、京都府・滋賀県出身者10名(当該地域以外の外住歴が3年以上ある者は除いた)、調査時期は2015年12月である。調査結果は図1～4に示した。

まず、存在動詞の本動詞用法については、大阪府・兵庫県・奈良県出身者はオル類の使用率が圧倒的に高いのに対し、京都府・滋賀県出身者ではイル類が優勢である。現在形と過去形の使用形式では、奈良県出身者に現在形よりも過去形でオル類の使用率が高いという傾向が現れているが、それ以外の地域では差はないようである。

シテイル相当形式については、「見ている」と「見ていた」、「疲れている」と「疲れていた」を比較すると、いずれの地域でも現在形よりも過去形でトル類の使用率が高いという結果になっている。タラ形・テ形については、奈良県出身者以外は、使用率が過去形と同程度で現在形よりも高いという結果になっている。タラ形・テ形は、形態的・意味的に過去形(タ形)と関連する形式である。したがって、現在形と過去形の非対称現象の要因は、これらの形式にも適用されるものとなることが予想される。

なお、否定現在形は、いずれの地域でもテル類が使用されているが、これは、否定辞ヘンに接続する場合に、シトラヘンではなくシテヘンがより定着していることによるもので、形態的な慣用化が要因であると見られる。

全般的な傾向としては、トル類は現在形よりも過去形で使用されやすく、タラ形・テ形は過去形に準ずる使用傾向があると見てよいだろう。図1～4からは、その傾向は大阪府出身者に最も顕著に見られると言える。

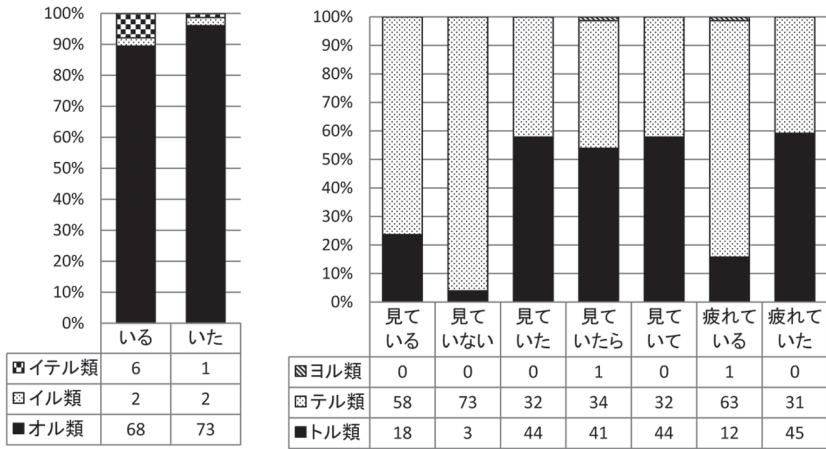


図1 存在動詞とシテイル相当形式の用法別使用率（大阪府出身者）

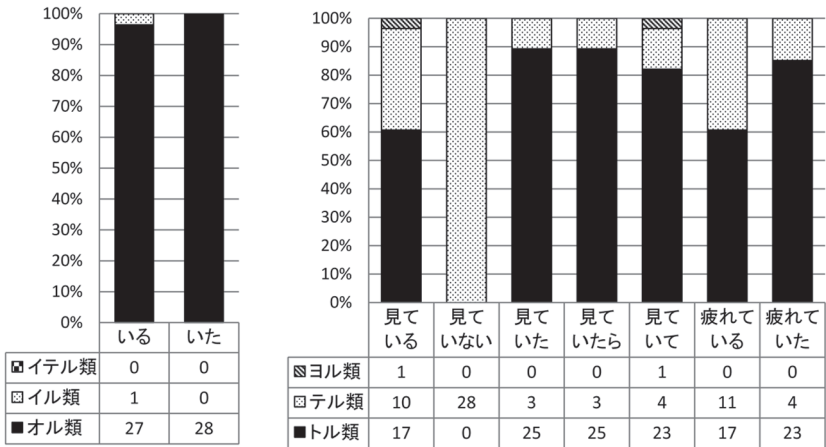


図2 存在動詞とシテイル相当形式の用法別使用率（兵庫県出身者）

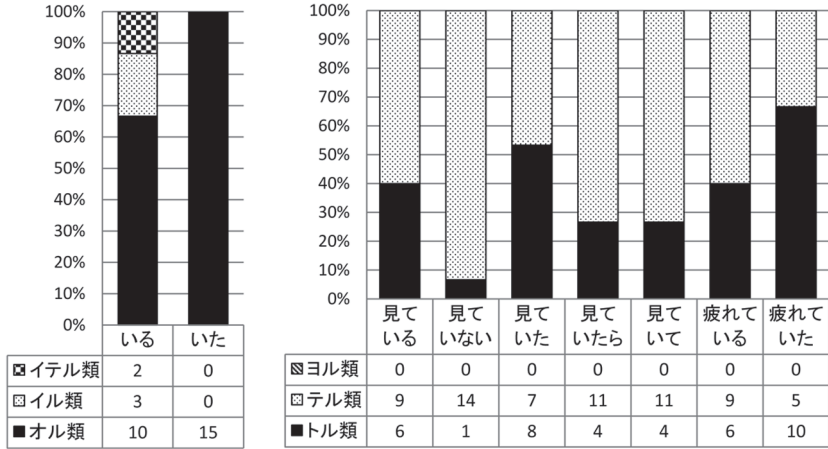


図3 存在動詞とシテイル相当形式の用法別使用率（奈良県出身者）

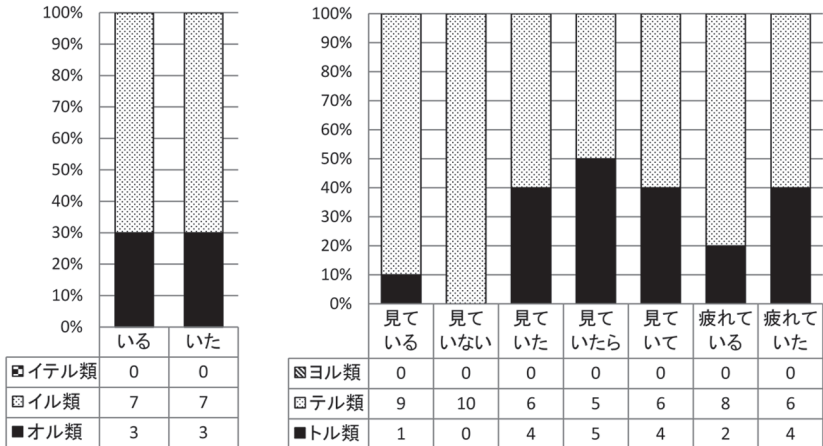


図4 存在動詞とシテイル相当形式の用法別使用率（京都府・滋賀県出身者）

3. 現在形と過去形の非対称現象の発生メカニズム

3.1 現在形と過去形の非対称現象の発生時期

トル類が、現在形よりも過去形（およびタラ形・テ形）で使用されやすいという現象は、いつ頃から生じたものなのであろうか。

シテイル相当形式の現在形と過去形がともに取り上げられている過去の調査として、『近畿方言の総合的研究』（1962）に収録されている「近畿方言文例抄」がある。共通の例文に対する近畿地方各地点の方言訳を報告しているもので、三重県、滋賀県、奈良県、和歌山県、大阪府、兵庫県が同一例文を採用している（福井（若狭）、京都府は独自の例文を採用している）。その中に、下記の2項目がある。

- 雨（が）降っているから、傘（を）差して行きなさいよ。
- あんなにひどい雨ばかり降っていたらう。それだから行けなかったのだよ。

各地点の方言訳の該当部分を表2に示す。

表2では、テル類、トル類に着目し、それぞれテル類の語形には○、トル類の語形には●の記号を付した（丁寧体の語形は除く）。それによると、現在形と過去形の使用形式は、どの地点もおおむね一致していることがわかる。テル類とトル類の使い分けが見られる地点は、現在形トル類、過去形テル類の回答が三重県伊勢市（03）、奈良県五条市（16）の2地点、現在形テル類、過去形トル類の回答が兵庫県篠山町（39）の1地点のみである。本稿で問題にするのは後者（現在形テル類、過去形トル類）の回答であるが、これがほとんど現れていないうえ、この現象の発生の中心地であると考えられる大阪府にこの回答が見られないことから、少なくともこの資料が作成された1960年代には、まだ現在形と過去形の非対称現象は、明確なものとしては、生じていなかったと見られる。

表2 「近畿方言文例抄」(榎垣編 1962) のシテイル相当形式 ○:テル類 ●:トル類

地点	降っている		降っていた(だろう※)	
01 三重県四日市市	●	フットン	●	フットッタ
02 三重県津市	●	フットル	●	フットッタ
03 三重県伊勢市	●	フットル	○	フツテイタ
04 三重県名張市	○	フツテル	○	フツタ
05 三重県大王町	●	フットル	●	フットッタ
06 三重県南島町		フリヨル	●	フツチョッタ
07 三重県尾鷲市		フツリヨル	●	フットッタ
08 三重県熊野市		フリヤル		フリヤツツ(口)
09 滋賀県東浅井郡	○	フツテル	○	フツタ
10 滋賀県蒲生郡		フツタール		フツタツタ
11 滋賀県草津市		フツタル		フリヤツツ(口)
12 滋賀県高島郡		フツタル	○	フツテイタ
13 奈良県奈良市	○	フツテル	○	フツタ
14 奈良県宇陀郡	●	フットル	●	フットッタ
15 奈良県山辺郡	●	フットル	●	フットッタ
16 奈良県五条市	●	フットル	○	フツタ
17 奈良県野迫川村		フリヨル	●	フットッタ
18 奈良県下北山村	●	フットル	●	フットッタ
19 奈良県十津川村		フリヨル	●	フットッタ
20 奈良県天川村洞川		フリョール		フツジョツツ(口)
21 和歌山県和歌山市	○	フツテル	○	フツテイタ/フツタ
22 和歌山県粉河町	○	フツテル	○	フツタ
23 和歌山県笠田町	○	フツテル	○	フツタ
24 和歌山県海南市	○	フツテル	○	フツタ
25 和歌山県清水町		フリヨル	○	フツタ
26 和歌山県御坊市	○	フツテル	○	フツタ
27 和歌山県串本町	○	フツタール/フツテル		フツタ
28 和歌山県那智勝浦町	○	フツテル		フツタ
29 大阪府(摂津)	○	フツテ(イ)ル	○	フツタ
30 大阪府(能勢)	●	フットル	●	フットッタ/フツテマツシタ
31 大阪府(三島)	○	フツタール/フツテル	○	フツテ(イ)タ
32 大阪府(中・北河内)	○	フツタル/フツテル	○	フツテ(イ)タ
33 大阪府(南河内)	○●	フツテル/フットル	○●	フツテイタ/フットッタ
34 大阪府(泉北)	○	フツテル		(アメバツカリ ダシタ)
35 大阪府(泉南)	○	フツテル	○	フツテ(イ)タ/フツチャツタ
36 兵庫県温泉町		フリヨル	●	フットッタ
37 兵庫県豊岡市	●	フットル	●	フットッタ
38 兵庫県和田山町	●	フットル	●	フットッタ
39 兵庫県篠山町	○	フツテル	●	フットッタ
40 兵庫県神戸市		フリヨル	●	フットッタ
41 兵庫県高砂市		フツリヨッ	●	フットッタ
42 兵庫県洲本市		フツジョル	●	フットッタ

※推量形語尾のうち独立性の高い「ヤロ(-)」「ジャロ(-)」「ダロ(-)」等は省略した。

次に、2010～2015年に調査が実施された国立国語研究所の全国方言分布調査プロジェクト（FPJD）⁽³⁾の下記の調査項目について見てみる。

- FPJD・G-55「走っている（継続相・現在）」：運動会で人が走っているのを見て、ハシリヨル・ハシットル・ハシッテイル・ハシッテタなど、地方によりさまざまに言い表すようです。この土地ではどのように言いますか。
- FPJD・G-56「走っていた（継続相・過去）」：徒競走が終わって、今はもう、誰も走っていないとします。「さっきまで走っていた」と言うときは、どのように言いますか。

上記2項目の近畿地方の回答のうち、テル類とトル類の回答パターンを整理して示したのが図5である（語形欄が「なし」となっているのはヨル類、タール類などテル類、トル類以外の回答のみが現れたことを示している）。

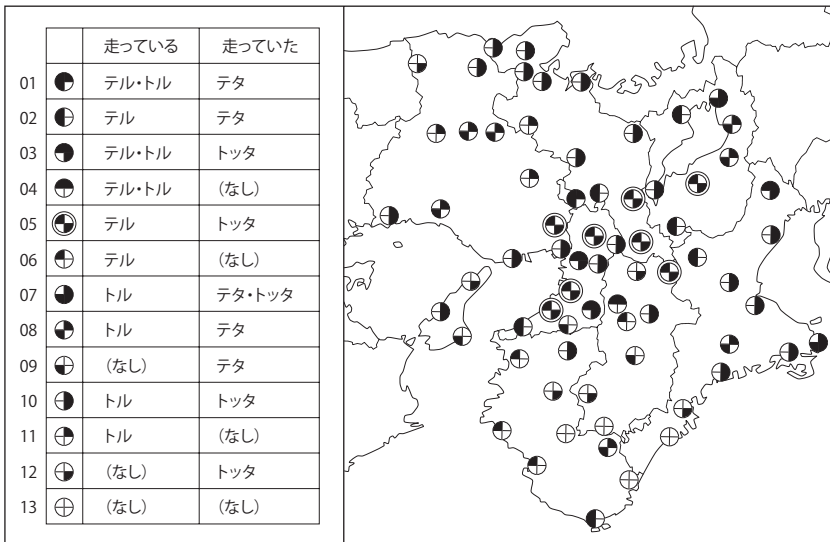


図5 FPJD「走っている」「走っていた」のテル類・トル類の回答パターン

現在形でテル類、過去形でトル類が使用されている回答パターンは05であるが、その分布は、滋賀県1地点、京都府2地点、大阪府3地点、兵庫県1地点、奈良県1地点となっており、大阪府を中心とした地域に集中していることがわかる。

FPJDの近畿地方の回答者の生年は1921～1944年なので、1960年代には10～

40代であった世代になるが、この世代において現在形と過去形の非対称現象が発生し、現在、若い世代に向けてその傾向が増しつつあるものと見られる。

3.2 現在形と過去形の非対称現象の発生要因

現在形よりも過去形においてトル類が使用しやすくなるという現象は、どのようなメカニズムによって生じたものだろうか。

この現象が起きる前提条件として、存在動詞のイルとオル、アスペクト表現形式のテル類とトル類の併用がある。1でも述べたように、近畿中央部方言では、イルとオル、テル類とトル類が併用される場合、伝統的に、イルとテル類は丁寧な表現で、オルとトル類はぞんざいな表現であるとされてきた。

図6は、トル類が中立待遇のアスペクト表現形式として用いられる地域と、軽卑的アスペクト表現形式として用いられる地域を示したものであるが、図5の05タイプの回答地点は、図6の軽卑的アスペクト表現形式のトル類の使用地域に含まれることがわかる。05タイプの回答、すなわち、現在形ではテル類を使用し、過去形ではトル類を使用するという非対称現象が生じる地点では、トル類が軽卑的な意味で用いられているわけであるが、過去形でトル類が使用しやすくなるということは、現在形では軽卑的な意味が前面に出るのに対して、過去形ではそれが解消（中和）されるということの意味している。

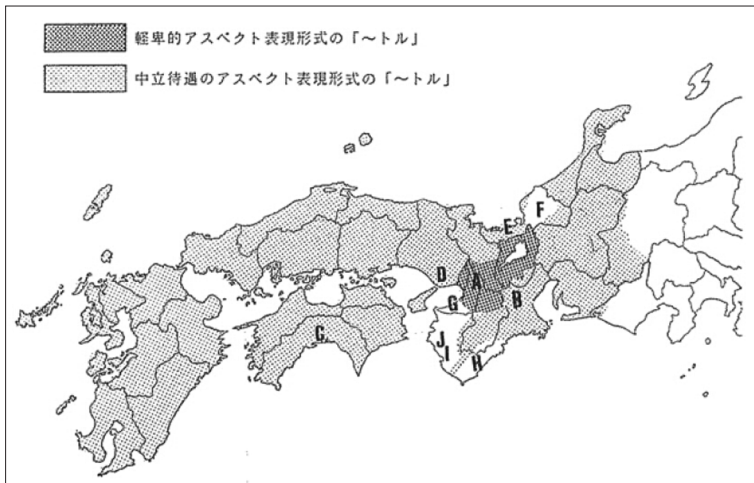


図6 近畿中央部方言におけるトルの軽卑アスペクト化 (井上 1998)

大阪府出身の50代女性話者（1959年生まれ）によると、(1)のような例文では、aのネトルにはぞんざいな語感があり、「しょうがないなあ」という呆れのニュアンスが込められるのに対し、bのネトツタにはそうした語感がなく、呆れのニュアンスも含まれないという。

(1) 「太郎はどうしたか」と聞かれて

a. 隣の部屋でネトルよ。

b. さっきまで隣の部屋でネトツタよ。

この現象は、ある言語形式の待遇的意味（に伴う感情表出）が、現在形において顕在化し、過去形において中和する現象として一般化することができる。そのように考えた場合、述語の卑語形式の中には、以下のように現在形と過去形で使用傾向の異なるものが存在する⁽⁴⁾。

(2) a. 太郎のやつ、こんな所でネテケツカル。

b. ?太郎のやつ、あんな所でネテケツカッタ。

(2a) が（ぞんざいな表現であるということ以外は）自然な表現であるのに対し、(2b) は、言語形式がもつ意味と表されている事態が合致しないという意味で、不自然に感じられる。ただし、これは述語の卑語形式のすべてについて言えるわけではなく、たとえばヤガルであれば、現在形、過去形の使用傾向に差はない。

(3) a. 太郎のやつ、こんな所でネテイヤガル。

b. 太郎のやつ、あんな所でネテイヤガッタ。

先に、(2b) の不自然さを「言語形式がもつ意味と表されている事態が合致しない」と説明したが、現在形で用いられるケツカルには、単なる見下げの意味だけでなく、表される事態への感情表出（嫌悪感、いまいmiss、呆れなど）が含まれているように思われる。一方、ヤガルはこうした感情表出の意味を含まない見下げのみを表す表現であると感じられる。

こうした感情表出は、感情が生じた発話時のものとして言語化されるものであるため、過去の事態について「報告」として述べる場合には、その事態を目にした直後の生々しい感情が伴わないために不自然に感じられるのであろう。なお、発話時の感情表出は、文末言い切りの現在形に顕著に表れるものであって、過去形に限らず、タラ形やテ形についても、発話時の感情表出を伴う表現にはなりにくい。

(4) 太郎のやつ、こんな所で {?ネテケツカッタラ / ?ネテケツカッテ} 風邪引くぞ。

このように考えた場合、トル類の現在形には、軽卑的意味に伴う感情表出が込め

られるために、その感情表出に見合う状況が伴わなければ使用されないのに対し、過去形ではそうした感情表出が込められないため、待遇的に中立な表現として使用可能になると説明することができよう。ケツカルとの違いは、ケツカルが本来的に見下げの意味をもつ語であるのに対し、トル類は本来的には見下げの意味をもつ語ではなく、テル類との併用によって相対的に待遇的意味が低下したものである点にある。トル類の軽卑の意味は、感情表出を伴いやすい現在形では顕在化するが、そうではない非現在形では中和されやすいものと思われる。

それでは、現在形と過去形の非対称現象の発生時期が、1960年代以降であるのはどのような理由によるのだろうか。

1960年代以降は、日本社会において標準語化が一気に進む時期にあたる。

近畿中央部方言では、イルとオル、テル類とトル類が伝統的に併用されてきたが、標準語化によって、存在動詞のイル・オルについては、イルは標準語形、オルは方言形というコード差の表現体系に組み込まれることになった。現在の大阪若年層話者の内省では、イルの丁寧さは標準語形のそれであり、オルのぞんざいさは方言形のそれであって、方言コードで使用するにはイルよりもオルのほうがふさわしいと認識されている。宮治（1990）の調査では、大阪府出身者のイルとオルの使用率は同程度であったが、今回報告した図1ではすでにオル類が圧倒的に優勢になっていることから、この表現体系の組み替えは、この20～30年間でも急激に進んできていることがうかがえよう。

アスペクト表現形式のテル類とトル類については、現在も標準語形と方言形の関係にあるとは見なされておらず、テル類は方言コードにおいても待遇的に中立的な表現形式であり、トル類は依然として軽卑的な意味を帯びている。一方で、存在動詞の本動詞用法において、オルが方言形と認識されることによって、方言コードでのオルの使用が一般化するのに伴い、補助動詞用法でもトル類を使用することへの抵抗感が弱まりつつあるのではないだろうか。そうしたトル類への抵抗感の弱まりが、軽卑の意味が中和されやすい非現在形において、トル類が使用されやすくなるという現象に現れていると考えられるのである。

4. おわりに

近畿中央部方言では、標準語化が方言の表現体系を組み替える方向で作用する傾向が強い。標準語の影響を受けた方言コードの発生という、いわゆるネオ方言（真

田 1996) の諸現象が、主に関西方言での事例に基づき報告されてきたのも、この地域のコード選択の特性によるものと思われる。その特性とは、日常のコミュニケーションの多くが方言コードで行われることであり、それは、方言コードに標準語由来の要素を組み込むことが頻繁に起きることにつながっている。

標準語化が進む前には、伝統方言の表現体系の中に位置づけられていたイルとオルが、標準語化が進むとともに新たな表現体系に組み込まれていく過程において、シテイル相当形式の表現体系に影響が生じている。その影響は、「現在形ではテル類、過去形ではトル類が使用されやすい」という、一見、標準語化とは無関係と思われる現象として現れている。トル類が現在形よりも過去形（非現在形）で使用されやすいことは、過去形（非現在形）におけるトル類の軽卓の意味の中和現象として説明できるが、それが明確な用法上の傾向として現れるようになった時期が 1960 年代以降であることは、標準語化による表現体系の組み替えの影響によると見なせるのである。

付記 本稿の一部は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国調査」(プロジェクトリーダー：大西拓一郎)の研究成果である。JSPS 科研費 23242024、25284087、25370539、26244024、26284064 の助成を受けている。本稿の執筆にあたっては、国立国語研究所の井上文子氏から助言を得た。記して感謝申し上げる。

注

- (1) 日高が関西大学で担当する「国語国文学専修研究Ⅲ」のレポート課題として、「関西方言文法調査票 2015 (否定表現・アスペクト表現・条件表現・待遇表現・確認要求表現)」による調査を実施。受講者自身が自分の使用形式を回答するとともに、持ち帰りで 50 代以上の話者に同調査票による聞き取り調査を行い提出してもらった。
- (2) 日高が関西大学で担当する「方言学入門」の受講者に対してアンケート形式で実施した。調査項目には、願望形「(私は) ずっとテレビを見ていたい。」を入れていたが、選択肢 (a ミテタイ・b ミトリタイ・c ミヨリタイ) 以外の回答 (ミトキタイ) が多く回答されたため、集計対象からは除いた。
- (3) 国立国語研究所の共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(プロジェクトリーダー：大西拓一郎)によるもので、筆者も共同研究

者として参加した。『日本語地図』(1966～1974年)、『方言文法全国地図』(1989～2006年)との経年比較を行うための項目と新規項目を含む176項目について、全国554地点の高年層話者(1915～1962年生まれ)への聞き取り調査が実施された。「走っている」「走っていた」は新規項目である。

- (4) 例文(2)以下の文法性判断についても、(1)と同様に大阪府出身の50代女性話者に確認した。

参考文献

- 井上文子(1998)『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて』
秋山書店
- 榎垣実(編)(1962)『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 金水敏(1984)「「いる」「おる」「ある」—存在表現の歴史と方言」『ユリイカ』16-12
- 金水敏(2006)『日本語の存在表現の歴史』ひつじ書房
- 国立国語研究所編(1967)『日本語地図2』大蔵省印刷局(現財務省印刷局)
- 国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図4』大蔵省印刷局(現財務省印刷局)
- 真田信治(1996)『地域語のダイナミズム』おうふう
- 宮治弘明(1990)「近畿中央部における人を主語とする存在表現の使い分けについて—アンケート調査から見た若年層の実態—」『阪大日本語研究』2

(ひだか みずほ／本学教授)